

『桜の開花を待ちながら…』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



若いとはいえ31歳の女性を「ちゃん」付けで呼ぶのはどうなのかなと思わないでもないけど、彩乃ちゃんは、「あやのちゃん」と自然に呼びかけたくなる雰囲気のとて可愛らしい人でした。両親は、「あやの」と呼んでましたけど、僕も看護師さんたちも、最初から違和感なく「あやのちゃん」と呼びかけていました。

彩乃ちゃんは、才色兼備のとて美しい女性で、両親にとってはたった一人の愛娘。小さい頃からクラシックバレエを習っていて、高校を卒業するまでバレエを続けました。地元の進学校を卒業した後、札幌の大学に進学し、大学時代は「よさこいソーラン祭り」で見事に優勝を果たしたそうです。大学卒業後は、それまでの経歴を生かして、ヨガ教室のインストラクターとして活躍していました。食事をちゃんとする暇もないほど多忙な社会人生活でしたが、何一つ病気もせず、健康そのもので過ごしていました。

20代の終わり頃、体調の変化を感じて、忙しい仕事の合間を縫ってかかった病院で、かなり進行した状態のがんが身体に広がっていることがわかりました。それまで風邪一つひかない健康な身体だったのに、いきなり見つかった病気が進行したがんとなかった時の衝撃は、当然、大きいものがありましたけど、持ち前の明るさで、大きな手術と放射線治療と抗癌剤の治療を乗り越えました。しかし、無慈悲な病気の進行は食い止められず、独身で過ごしてきた彩乃ちゃんは、生まれてから高校を卒業するまでの間を過ごした懐かしい両親の家に帰ってきました。

初めて自宅に伺ってお会いした時、玄関に入って直ぐのリビングに置かれているソファに座っていた彩乃ちゃんは、パッと明るい笑顔をこちらに向けて「こんにちは～」と挨拶してくれました。痩せてはいましたが、はつらつとした様子でしたし、この頃はまだ少しは口から食べたいものを食べたりもできていました。僕たちが訪問し始めて数週間後にはソファに横になった姿の彩乃ちゃんになり、間もなく、家の一番奥の部屋にあるベッドに横になっている彩乃ちゃんと対面するようになりました。

僕も長く臨床の現場で働いていますので、たくさんの患者さんを診てきて、患者さんにこの先どんなことが起こってくるのかが、ある程度の範囲で予想がつきます。彩乃ちゃんに関しては、がんが広がっている場所からしてこんな症状が出てくる可

能性があるけど、そうになったら辛いな…嫌だな…と、できることならば避けて通りたい様々な辛い症状の出現を危惧していたわけですが、悲しいことに、それらの症状はことごとく出現し、彩乃ちゃんの身に襲い掛かりました。それを見ている両親は、もしかしたら彩乃ちゃん以上に辛かったかもしれません。両親も祖父母も、代わってあげられるものならば代わってあげたい…と何度も思ったことでしょう。腎臓を入れ(迅速に対応して下さった日鋼記念病院泌尿器科の榎並先生に、この場を借りて御礼申し上げます)、腹水を何度も抜き、最終的には経鼻胃管も入れたままにせざるを得ませんでした。こんなに若くて美しくて聡明で優しい彩乃ちゃんが、愚痴ひとつ言わずに両親や祖父母や私たち医療者など周囲の人たちに明るい笑顔を向けてがんばっている彩乃ちゃんが、どうしてこんなにも次々と試練に見舞われなければならないのか…と、思いました。お母さんと二人だけでいる時に、一度だけ、彩乃ちゃんは嗚咽して泣き続けたことがあったと、お母さんから聞きました。

美しい彩乃ちゃんがどんどん痩せ細っていく姿を見るのは、ほんの最近知り合ったばかりの他人である僕たちでさえ辛いのに、赤ちゃんの頃から手塩にかけて育ててきた大切なたった一人の娘を見守るしかない両親の気持ちは、本当に辛いものがあったはず。それでも、彩乃ちゃんの両親は、彩乃ちゃんのために、ずっと明るい空気を家の中に作り出すように努力されていて、彩乃ちゃんが亡くなった時に初めて、愛娘に取り縋って、人目を憚らずに声を上げて泣く両親の姿を目にしました。

僕たちが彩乃ちゃんと過ごした冬の終わりから春の始まりまでの71日間、僕はといえば…、医療の無力さを痛感する日々でした。辛い症状を少しばかり和らげてあげることに、これ以上は医療者としてどうすることもできない時にも決して傍を離れずそこに居ること、できることと言えばそんなことくらい。奇跡を起こす力はありません。それでも無力な者は無力な者なりに、これまで培ってきた僅かばかりの知識と経験と自分自身の生身の身体一つで、ほんの少しでも助けになれるよう力を尽くすのみ。

桜の開花に少し間に合わなかった彩乃ちゃんを、その愛くるしい笑顔と共に覚えていたいと思います。